

平成23年度
自主研究事業

講演会
「エネルギー文明の崩壊を超えて」

平成24年3月



一般財団法人
南西地域産業活性化センター

講演会「エネルギー文明の崩壊を超えて」

日時：2011 年 12 月 16 日（金）15：30～17：30

場所：沖縄国際大学 5 号館

主催：沖縄国際大学 総合研究機構 産業総合研究所

一般財団法人南西地域産業活性化センター【NIAC】

～会 次 第～

総合司会：上江洲 豪（NIAC）

1. 開会挨拶 15：30～15：35
沖縄国際大学 常務理事 廣瀬 牧人
2. 講師紹介 15：35～15：40
司会
3. 講演会「エネルギー文明の崩壊を超えて」 15：40～16：30
講師：武田 修三郎 氏
（早稲田大学大学院 公共経営研究科 教授、NIAC 顧問）
4. 学生との意見交換会 16：30～17：15
武田氏 および 岩崎氏、藤村氏（ともに早稲田大学 OB）、
宮城氏、金城氏（ともに沖縄国際大学学部生）
5. 会場からの質疑応答 17：15～17：30

※終了後に 18：30 頃からレセプション（懇親会）を開催。

二〇一一年十二月十六日（金）

武田修三郎先生講演会

「崩壊するエネルギー文明を越えて」

開会挨拶 廣瀬牧人 沖繩国際大学 常務理事

さて、本日は、「崩壊するエネルギー文明を越えて」と題した講演を頂くわけですが、やはりイメージされるのは“安全神話の崩壊”であります。これは、常に何か大きなことがあるたびに出てくる言葉ですが、“安全神話の崩壊”という言葉は、一七年前の阪神大震災のときにも叫ばれていたことでもあります。

「パラダイム・シフト」というのは、私の記憶が間違っていないければ、確かクーンが主唱しドラッカーが引き金を引いた言葉だったと認識しております。我々は日常生活の中で、価値観や思想の変化、そういったことを意識しながらも、実は、全く認識はできていないのです。例えば化石燃料に関して言うと、私が大学に入った一九七三年には既に、石油はあと四〇年で枯渇するという話が出ておりました。その後もずっと、エネルギーに関しては議論が続いているのですが、実際、石油がまだ出てくるのが不思議な感じがえます。このように、我々は、頭では意識していても、実は、生活レベル、活動レベルでは全く認識できていないのです。それを私たちのような研究者およびそれに関わる者が、なんらかの形で実体化させていくことをしなければならぬと感じています。

そういう意味で、本日のご講演は非常に時宜を得たものであると考えており、お引き受け頂いた武田先生には感謝申し上げます。また、ここにお集まり頂いた聴衆の皆さま、学生諸君には、今後の我々の生活や生き方に直結する講話として受け止めて頂き、皆さまの力によって具現化して頂くますようお願い致します。

本日は、お集まり頂きありがとうございます。それでは、よろしくお願い致します。

講演 武田 修三郎 先生

ご紹介頂きました武田と申します。

実は三六年前に「崩壊するエネルギー文明」という本を出版致しました。本日は、当時のエネルギー事情や、今の世の中がいったいどうなっているのか、そうしたお話をさせて頂きたいと思っております。それからもう一つ、今、私が一番興味を持っています「育人研心」について、お話しさせて頂きたいと思えます。どうやって人を育てて、ど

うやって心を研ぐのか、そうした話も含めさせて頂きます。

本日はエネルギーの話をさせて頂くのですが、なぜこのような三六年前の本を引きずり出して、もう一回リメイクしたのかというと、三六年前に心配したことがその通り起きてしまったという事実と、それをもう一度繰り返して欲しくないという思いからです。三六年前の石油危機の折には、ほとんどの方はまだ生まれていなかったと思うのですが、石油危機により、私たちが初めてエネルギーに注目した時代がありました。そのときには、太陽エネルギーにはじまり、核融合、あらゆるもの、あれがいいこれがいいなどと、学者先生方は言っていたのですが、今、振り返ってみますと、全てダメになってしまっています。ですから、私たちが直面している世界のことをもう一度考えて頂きたいと思うのです。

最初に、今の世界がどうなっているかという話をさせて頂きます。ここでは、私たちが住む世界は、限りある宇宙地球号であるということをお考え頂きたいのです。宇宙地球号の中には、都市を始め様々な組織があります。ただ、都市といってもその多くは残念ながらスラムです。先進国アメリカでも同じで、例えば、テキサスのダラスにはスラム街があります。私たちは宇宙地球号の中で、次から次へと便利なものを作っていききました。しかし、それは今後、「やっかいなもの」と形を変えようとしています。私たちが便利だと思ったもの、あるいは、私たちの経済活動に必要だと思ったものが、こうした形で「やっかいなもの」になっているのです。三六年前に私が考えたのは、無限から有限への大きな流れが出てきたな、ということでした。実際に、私たちは限りある宇宙地球号の中でどうやって生きていくのでしょうか。新しい文明、今までと違った時代が来ているのです。人口問題でいえば、私たちの宇宙地球号の定員はどうなっているのでしょうか。三六年前はというと、世界の人口は三八億人で、もう既に地球号の定員はいつぱいだと考えていたのです。それが今では七十億人です。

「BOP」という言葉を知っていますでしょうか。開発途上地域に在る低所得者層を意味する“Base of the Pyramid”の略です。彼ら下層階級の方々は、一日一〇ドル以下で生活しています。インド、中国、それから意外なことにアメリカにもかなりのBOPに属する人々がいます。つまり、私たちの時代というのは不条理な状態なのです。これは、私が本を書き直す理由になった一つなのですが、後進国だけではなく、この不条理な状態が二〇年の間にいつの間にか日本にもやってきてしまった。

「日本のウィツキド（やっかいな）現象」と題した資料を用意しましたが、これは日本と中国の名目GDPを表したものです。これを見てお分かりになると思いますが、中国が日本を追い抜いたというよりも、日本が衰退してきている状況なのです。この状況を見て、海外では日本のことを「新興衰退国」と表現しています。過去においては、発展途上国の経済振興が世界共通の課題として認識されていたのですが、現在においては、新たに先進国の衰退への対応という、ウィツキド、つまり、やっかいな課題が持ち上が

ってきているわけです。日本の場合は、国家が成長を続ける通常の姿、いわゆる「ノーマル」と言われる状況は、九〇年代ぐらいまでで終わっています。そして、現在においては、ほぼ国家が成長しない状況が普通の状態、つまり、「ニューノーマル」と表現される時代となっています。よって、ここにいらっしゃる方のはほとんどは、ジリ貧国家の中で育ってきたわけです。

そして実は、今の日本は体力だけが衰退しつつあるのではなく、心までがボロボロになってきています。ここに「米国への留学生数」というタイトルのグラフがありますが、これは二〇一〇年の一月三〇日に「エコノミスト」という世界で最も権威のある経済誌に掲載されていたものです。これを見ると、ここに挙げられた国のうち、インド、中国、韓国などのアジア諸国と比較して、日本の米国への留学生が少ないだけではなく、減少傾向にあります。対してインドと中国はどんどん増加している。このままでは、外の状態を何も知らない日本人が増えてしまつて、新しい文明、新しい時代が到来した時に全く役に立たないという非常に困った状況を迎えてしまうと懸念しています。これは、私たちの体だけではなく、ものの見方や心、言い換えればマインドセットまでもがダメになってしまつていくことの表れだと思っています。先ほどお伝えした日本における「ニューノーマル」の世の中で、自分で何かやろうとする人たちがこの一〇年で急激に減つてしまつた。この原因として、若い人たちに問題があるのではなく、その人たちが育てる私たちの世代に問題があつたのだと思います。つまり、頭の作り方、心の作り方を若い人たちにちゃんと教えてこなかったのです。例えば、最近話題になつた大阪市役所の方々の状態はご存じだと思います。役所に勤めることができれば良いというような状況が方々にあります。しかしながら、今後は役人が最も苛められて、更にはいつ首を切られるかわからない状態になると思います。そういう人たちではなくて、自分で何かを始めるような人たちを作っていく必要があるわけです。日本においては、色々な問題がこういう形で出てしまつていく。こういう状況について、豊かになつたから日本人の思考が内面的になるという論調もあるようですが、それは嘘っぱちです。確かに一九九〇年代までは、日本は世界第二位の豊かさ、実質的には世界でナンバーワンの豊かさを誇っていました。しかし、そこからずるずると落ちていって、主要国の一人当たり名目GDP（購買力平価ベース）で見ると、今はもう二〇位後半、アジアでもPPPでシンガポールや香港に追い抜かれてしまつた。このまま行けばもともとと下がるでしょう。他にも資料にあるように、日本の相対的位置というものはどんどん低下してきています。悪い話ばかりを申し上げましたが、今の日本がこういう状態にあるということをしっかりと認識してもらいたいと思います。このような状況から抜け出すために、私たちは自分のことをちゃんと点検できる人間でなければなりません。特に、あなた達は今後の日本をリードしていく、トップになるべき存在なので、それをしっかりと点検できなくてはいけません。

さて、海外に目を転じて、昨今の話題としては、イタリア経済が崩壊しつつあることはご存じかと思えます。既に辞任することが決まつたベルルスコーニ首相ですが、彼は絶対的な政治力の下、複数回に亘る女性とのスキヤンダルや、元ヌードモデルの人を大臣にするといったことで有名な人物ですが、結局、九年もの間イタリアの首相を務め、最終的にはイタリア経済を崩壊させてしまいました。このような経済危機を招いたのもトップがしっかりとしていなかったからです。アメリカにおいては、オバマ大統領も様々な課題を抱えることで、本当に再選されるかどうかかわからない状況です。このように、いつの間にか日本のウィッキドな状態が、他の先進国にも伝わってしまつていきます。資料にも記載していますように、現在のアメリカも多くの課題を抱えていて、いつの間にか内部崩壊状態を迎えています。いったい何が起つたのでしょうか。三六年前、私には時代が変わるということがうつすらと見えたような気がしていましたが、急激で大きな時代の変化がこの一〇年、二〇年の間に起きました。先ほどの廣瀬先生のご挨拶で、「パラダイム・シフト」という言葉を使つて頂いたのですが、正に時代は変わったのです。その変遷の中で、様々な場面において今までのやり方でやっていてはダメになっています。今後、成長が見込まれている国々のうち、六割から七割がG8諸国ではなく、G20の仲間入りをした新興国です。お隣の中国にもそろそろ限界が来ると考えています。しかし、それらの新興国の後には、アフリカ等の国が続くでしょう。そのくらい、全てが新しい時代を迎えるわけです。ですから、今までのものの考え方、今までの脳を保つままの見方では、世界のイノベーションが起る率は急激に下がる一方だと思えます。現在の私たちが足を踏み入れている文明時代というのは、一四世紀ぐらいに始まつたものです。そこから次の段階へ歩みを進めるためには、次の時代の考え方が持てる人、例えば、ステイブ・ジョブズのような人間が出てこないことには、もう一段上がることはできないと思います。今回、リメイクした本の表紙には、トレッドミルに乗るネズミの挿絵を使っていますが、その絵の通り、どれだけ懸命に走つてもその場所から動くことはできない、今はそういう時代になってしまつています。

このような状況の下、先行きを心配しているのは、私たちの世代よりもむしろ若い方々のほうだと思えます。さて、今後、私たちが次の段階へ進むということが起こり得るのでしょうか。私は必ず起こるだろうと思っています。ただし、先ほどからお伝えしている通り、新しい時代に合わせた心をセットして、しかるべき道具作りをしなければいけません。既に新しい文明、新しい時代が到来していると言っても、ほとんどの方は知らないとおっしゃるでしょう。私は三六年前にそのことについて本を書きました。その中で、全ては無限ではなく有限であり、そこには科学技術さえも含まれるのだということを記しました。アメリカの著名な経済学者であるジョン・ケネス・ガルブレイスは、確実性から不確実性の時代となること、アルビン・トフラーは、工業化から情報化の時代となることを予見しました。そして、今ではグローバル化の時代が到来しています。

私は、世界はフラットだ、という言い方が好きです。もちろん、地球が平らであるというのではなく、人間はみんな同じであるということです。これまで、私たちは、どこかで日本人は特別だと、アメリカ人は特別だと考えていたけれども、実際のところ、全ての人間は同じであるということです。では、フラットである中での違いは何かと言いますと、どうやって脳を作るか、どういうマインドを持って次の時代に臨むのか、その違いによって差異が生まれてくるのです。ですから、次の時代を知る必要があるのです。次の時代における新たな文明の神髄を知らなければ、とてもそのような準備はできません。それと同時に、時代の潮目をつまみパラダイム・シフトをどうやって渡すのかも考えなくてはなりません。これまでどおり「普通」のことをやれば必ず没落します。例えば、日本がこんなに不利な条件の下で、どうして円高なのでしょう。国際経済が苦境を迎えている状況において、日本はほとんど何の対応もしないにも関わらず、今のところ、何もしない方が良かったという結果がこの円高につながっています。アメリカにしろヨーロッパ諸国にしろ、他の国では偉い経済学者たちが必死に対応しているにも関わらず、経済状態が悪くなっている。これは、何もやらないことが正解ということではなく、パラダイム・シフトを迎えている時期のパラドクスと言える現象の一つなのです。つまり、今まで通りのやり方ではやるだけダメになってしまふ。「ディスラプティブ」という言葉を聞いたことはありませんでしょうか。日本語でいうと「破壊的な」という意味ですが、ディスラプティブなやり方で、つまり、今までのやり方を破壊して違うやり方で対応しなくてはいけない、そういう時代なのです。

このような新たな時代の本質として、私は「研心」という言葉も挙げていますが、心研ぐことについて、それは心の問題であるなどと古臭いことを言ってはいただけません。ハーバード大学、シカゴ大学等、世界のトップの人たちと私とよく議論していることは、どのように「育人」、つまり、人を育てていくか、そして、どのように「研心」、つまり、心を研いで優秀な脳を作り上げていきたいと思いますか、ということなのです。決して日本だけの関心ではなく、育人はdevelop humanity、研心はcreating capabilitiesです。更に、常に革新し続けなくては新たな世界は実現しません。ステイプ・ジョブズが個人用のパソコンや、もっと使いやすいタブレット端末を考え出したことによって、一〇年前には潰れそうだった会社を現在のような世界一の時価を誇る会社に育て上げました。同様に私たちは革新し続けなくてはいけないのです。きつと、心や脳を作るなんていう話は、これまで聞いたことがないと思います。しかし、こういう考えが非常に大切なのであり、それこそが次の時代の教育であるべきです。

ところで、世界がフラットになった後に何が起ったかという点、誰もが教育が一番大事だということ意識することとなり、世界各国で教育の大競争が起きました。世界中の人が一生懸命勉強し始めて、二〇年前まで大学生は五千人でしたが、今では一億六千万人もいます。皆さんのライバルはこの間に三倍になった。その中で、何故、日本

の学生が中国やインドの学生の五倍の給料を貰えるのでしょうか。既に学歴が横並びの時代を迎えていますから、このままでは、近い将来、日本人だけがいい給料を貰える日々は終わってしまうでしょう。だからこそ、もう一度、私たちは学び方を再考し、心を研ぎ直さなければならぬのです。

こういったお話をする際に私が強調したいことは、色々なものの関係を重視して、全体をコネクトする力を付けてください、ということ。そして、「変化」が正しいのだということを感じてください、ということ。そういう時代が来ているのですから。

近代の偉大な哲学者ルネ・デカルトは表面が大事だと説きました。つまり、学力や専門性、知識などの事実が大切であると説いた、ということになります。一方、その後、二〇世紀に出た大哲学者であるグレゴリー・ベイトソンは深部こそが大事だと説きました。これは、デカルトの説に対応させるならば、自尊心や好奇心、ものの考え方といった精神性や意識こそが大切であり、「専門家」ではなくて「達人」を作ることが重要視する考えだと言えるでしょう。脳を作り上げるときは、筋肉と同じように、繰り返し動かすことによってしか発達させることはできません。実は、多く人は、その繰り返しには注目せず、あの人は天才だとか生まれながらの素質があるとか、そういう言い方で逃げてしまっている。本当に意識しなくてはならないことは、姿勢や恰好といった表面上に表れることではなくて、もっと深いところにある心を鍛えることなのです。

引き続き脳の話ですが、私たちの脳にはそれぞれ数億個のニューロンという神経細胞があります。このニューロンは、体の他の部分の耐用年数をはるかに超え一二〇年の寿命があります。イラストを参照して頂きますと、そのニューロンから一本伸びている軸索と呼ばれる部分があります。この一つ一つが他のニューロンと接合部シナプスを通じてコネクトされます。これらを経由し、信号が伝達されるわけです。イラスト中に「ミエリン鞘」とありますが、これに保護膜のような形状のものが軸索に出来てくると信号の伝達スピードが上がっていきます。この保護膜ができるのは繰り返し思考することですが、生物学的プロセスだけに時間がかかります。これは軸索の断面のイラストですが、年輪状のものとなり、五〇層くらいできると、伝達スピードが五千倍くらい早くなると言われている。一瞬に多くのことがでかします。スポーツする方は知っていることですが、運動能力は筋肉ではなく脳で、どれだけ脳を鍛えたかです。ですから、女子サッカーの澤選手、あるいはアイススケートの浅田選手がああいった天才的な運動能力を瞬時に発揮できるのは、素晴らしい筋肉をもっているというより、脳を鍛えていたということ。この脳づくりが必要なのは研究、ビジネス、あるいは家庭の仕事にあたっても同じです。ビジネスでも脳を徹底的に鍛えていかなければ、世界では通用しません。現在のよう、知識刷り込み型の勉強法では脳を萎縮させる、つまり、旧式の脳を作ってしまうのです。これでは狭い専門家の域を超えることはできず、新時代に活躍することが期待できません。脳は恐るべき可塑性を持っています。脳の可塑性とは、時々で神

経回路を発達させる。具体的には環境に合わせてニューロン同士のコネクティングを増やし、あるいはシナプスと呼ばれるコネクティングの仕方を調整する柔軟性ことであり、これを行い得る性質を指します。この可塑性によって、脳は一〇〇歳を超えても常に新しいことに適応できる能力を持っているのです。誰にでもその能力は備わっているのですから、私たちは常に新時代タイプの脳を作るように心がけなければいけません。

ここからは、エネルギーの話、新しい時代のエネルギーがどうなっていくのかという話をいたします。さて、エネルギー消費というものは、経済成長と常に密接な関係を持っています。そして、肉の消費は、エネルギー消費と関係しているという事実もあります。肉の消費は経済成長とともに増加する傾向があり、エネルギー消費もまた同様というわけです。皆さまのように次の時代に生きる人々には、エネルギーだけを取りあげると言う近視眼的アプローチではなく、同時に全体を見る訓練をしてほしいのです。肉の消費の情報から更に発展させて、牛肉と豚肉、鶏肉の消費を分けて考えると、結論は全く別のものになるでしょう。また、それぞれの肉を生産するにあたって、生産に必要なカロリー、例えば、それぞれの飼料の生産に係るエネルギー量を考える必要があるかもしれません。穀物についても同じで、大豆、麦、米を生産するにあたってエネルギーが必要になります。そして、水も必要です。一キログラムの穀類を得るためには、一〇トンの水が必要だという話も聞いたことがあるでしょう。これらは全てエネルギー問題として認識されるわけです。水資源については、幸いなことに、私たち日本においては割と豊かであると言えるでしょう。一方、中国では一〇数億もの人口を支えるには十分ではないかもしれません。インドも同様です。他方、ブラジルの場合には中国、インドに比べてはるかに豊かな水資源があります。次の時代で勝ち抜くためには、このようなことを即座に頭の中に描ける状態である必要があるのです。世界のエネルギー資源がすぐに枯渇してしまうということではないと思いますが、残されたエネルギー資源がどれだけあるかという議論は常に行われています。現時点で判明している原油の埋蔵量について、深海に膨大な埋蔵量があると想定されていますが、採掘するには莫大な資金が必要であるということです。このように、世界各地で新たなエネルギー埋蔵地域が発見されている一方で、実際に、アメリカ本土における石油の生産量は既にピークを過ぎています。では、世界の生産量はどうかという点、もしかすると、去年、ピークが来たかもしれませんし、今年ピークを迎えるかもしれません。そういったことまで含めて、総合的に判断する能力を身に付けてほしいのです。

さて、原子力についてお話しすると、あのチェルノブイリ原発事故が起こった時、私たちは原子力というものに対して大変悲観しました。ただ、四〇五年程前からは、温暖化ガスを排出しないということで環境にいいという判断から原子力ブームとなりました。そこへ福島原発事故が起こってしまい、再度、原子力の将来について検討を行う必要が出てきました。今月（十二月）に元駐日大使のベーカーさんを中心にワシントンでボ

スト福島を考えるフォーラムを開催しました。今後、原子力を維持していくべきかどうかといったことについて協議したわけですが、それではすぐに原子力を全廃するかというと、そういうわけではない。完全撤退を行う可能性はあるのは、たぶん、ドイツとイタリアだけでしょう。原子力関連で私が関与したものとしては、核兵器の不拡散に関する条約があります。その後、CTBT O（包括的核実験禁止条約機関準備委員会）が設置されています。これは、国連で採択された包括的核実験禁止条約に基づいて設置された機関で、核実験を実際に禁止するような形で核実験の監視を行う機関です。関連して、ご存じないかと思いますが、群馬県高崎市とここ沖縄に放射性核種観測所がありまして、福島原発事故の後、双方において放射性物質が計測されました。私は二〇一一年一月に、ウィーンで開催されたIAEA（国際原子力機関）との会合に参加しました。そこで、改めて原子力の安全性を高めるための議論が行われました。それを受けて、以前から私が一種の夢のような形で構想を持っていた、沖縄への国連による関連施設の設置を思い出しました。ここ沖縄にそういった施設を設置して、原子力のみならず様々な事柄についての安全性を研究する施設を誘致できないかと考えております。是非、皆さまもそういうものを誘致できるような一緒に努力して頂きたいと思っています。

日本の原子力政策について、世の中は太陽エネルギーですとかバイオですとかそういったエネルギーにシフトすべきであるとの方向に進んできております。しかし、アメリカにおいては、即座に太陽エネルギーや風力エネルギーに転換することは非現実的だと国民が判断しています。今後は原子力エネルギーも活用しつつ、天然ガスの重要性が高まると考えられているようです。これは福島原発事故が対岸の火事であるという反応かもしれません。ただし、私も現在ピークを迎えている石油に代わって、天然ガスの時代は必ず来ると考えています。現時点では、石油と連動して天然ガスの価格が高騰していますが、今後開発が進むことによって、その価格は必ず下がってくるものと見ています。こういうことに対して準備をしてみたいと思います。決して、原子力はダメだ、太陽エネルギーはダメだと決めつけているわけではなく、現実問題として、エネルギーのシフトには非常に時間がかかるのです。科学や技術が万能だなんて、絶対にはないのです。

エネルギーを算定する式をご参照頂くと、技術力の影響は全体から見ると本当に少しだけしかないからです。国家を支えるために、経済については上げていかななくてはなりませんので、GDP当たりの消費エネルギーをどれだけ小さくするかということに集中する必要があります。また、同様に環境への影響をどれだけ小さくするかということも大切です。そこで科学技術が必要とされるわけですが、奇跡というものはなかなか起こりません。ですから、急激にエネルギー源がシフトすることは考えにくいので、時間をかけて対応していくことが必要なのです。原子力の失敗は、急激に伸ばそうとしたことに起因しています。もっと時間をかけて、小型で安全なものを目指すべきだった。私たちが使うべきエネルギーというものは、環境に良く、使いやすいものである必要があります。

す。エネルギー比でみると、石炭は石油の一〇〇倍もの量がありますが、環境負荷が小さく、しかも使いやすいために石油の方が多く使用されています。そして天然ガスは、石油よりはるかに環境に良くて使いやすい。どうか、二一世紀中にエネルギーが枯渇するなんていう話はやめてください。あるいは、枯渇するから原子力を使うという話しも止めるべきです。そして、太陽エネルギーが主力と考えることができるようになるのは、二一世紀の終わりから二二世紀にかけてでしょう。もちろん、太陽エネルギーやバイオエネルギー関連ビジネスを止めてくれと言っているわけではありません。これらは、中国のへき地、インド、アフリカという地域において、大変大きな発展を遂げる可能性があると考えています。

今日、ここまでで、一気に多くのことをお伝えしてきましたが、二四時間経った頃には五%位しか覚えていないでしょう。それが人間なのです。私自身も実際に教える立場ではありませんが、それでも何を話したか九〇%くらいはすぐ忘れてしまいます。そういう事実を、教える側も教わる側も知っておかなくてはなりません。例えば、電話番号の八桁の数字は、まず一回で覚えられないでしょう。普通の人間にとつては五桁から七桁が限界だと言われています。しかし、普通の先生方の授業はそれ以上の情報を一度に詰め込むような授業をやっています。でも、詰め込み型ではダメなのです。これまでも何人かの学生が席を立ちましたが、彼らはもう頭が一杯になってしまったのでしよう。先ほど、脳のイラストを見て頂きました。今お伝えしていることは、脳をどうやって作るかという作業に繋がっているのです。それは非常に時間のかかるプロセスなのです。時間ばかりですが実行は可能なのです。ですから、若い人達は私たちの脳がどのような仕組みになっているのか、また、世界中の同じレベルの年齢の人々がどのようなことをしているのかを知らなければいけない。フェイスブックの創始者であるマーク・ザッカーバークだって、もともととは天才でも何でもありません。頭にうまく考える仕組みを作っているのです。

先ほど、専門家ではなくて達人、熟達者になりなさいと言いました。私は京都大学のリーディング大学院、思修館、思いを修めるですが、の動きに注目しています。そこでは、いかにして世界のトップリーダーを作るかということを目的にしています。そこでは、ただの「講義」なんて言葉は使いません。「熟義」「塾学」という表現していますが、何度何度も繰り返し深部について考えるということを実践しています。この考え方は、禅の世界と同じだと思います。かのステイブ・ジョブズも禅を学びました。ステイブ・ジョブズやビル・ゲイツが台頭し始めたのは、本日の学生の方々とほぼ同じくらいの年齢の時です。そして、ソニーのプレイステーションⅢのシステムを破ったハッカーとして有名なジョージ・ホッツも同じような年齢です。ちなみに、これ自体は犯罪ではありません。現在のような転換期には彼らのように、既存のものを平気で破壊する、デ

イスラプトする力が必要なのです。他にも、先ほど触れたマーク・ザッカーバークの開発したフェイスブックは、今ではEメールよりも使用されていることです。ツイッターの創始者であるビズ・ストーンやジャック・ドーシーも三十代そこそこです。こういう人たちが日本でもIT関連だけでなく、様々な分野において次から次へと出てこなくてはならない。それらの人を私たちがどうやって応援するのか、です。先ほど挙げたジョージ・ホッツなどは、一〇年も経てば、アップルに相当するような企業を作るポテンシャルを持っている人財ですが、私たちは、日本にもでてくるこれらの人を大事にしないといけない。結局、私たち先生方の役割は自分よりいかに偉い者を作るのかに変わったのです。そして、社会をあげて未来のこういう人たちを応援していく必要があります。その時には小さい日本の内部でしか生きられない人たちを絶対に作ってはいけません。そのためには、母国語以外に最低もう一つの言葉を話せるようにすべきです。

最後になりますが、ステイブ・ジョブズの言葉の中で私が好きなのは、「初心」というものです。また、彼は、「あらゆる物を捨てて、あらゆる技術を捨てても、自分はソクラテスと話してみたい。」と言い知性を最も重視しました。ピーター・ドラッカーも、学び方を学べと言っています。私が言いたいことは、自分がどうやって学習して、どうやって記憶するかを意識してくださいということです。それを認知科学の用語では「メタコグニション」といいます。自分の考え方をチェックしなさいということです。先に脳は身体の中で一番タフだと言いました。頭を使えば使うだけ、それに応えてくれます。私たちの世代の頃は大学の四年間だけが勉強する期間だったのですが、若い学生の方々の世代においては、就職しても、八〇、九〇になっても真剣に勉強しなくてはならない、そういう時代が変わった。二年程前に、「フロニーモスたち（心を研ぐ人）」という本を出し、「心を研ぐ」というアリストテレスが作った言葉をテーマとしました。現在も「育人研心」と生きている限り心を研ぐという本を書いておりますので、出来たらまた皆さまに読んで頂きたいと思います。以上です。本当に話を聞いていただいてありがとうございます。

学生との意見交換および会場からの質疑と応答

パネリスト：武田修三郎 先生、岩崎希世氏、藤村慎也氏

宮城祥氏（冲国大学生）、金城茉乃氏（冲国大学生）

コーディネーター：宮森正樹 冲縄国際大学産業総合研究所 所長

総合司会：上江洲豪 南西地域産業活性化センター 調査第二部長

宮森：武田先生、大変興味深いお話を頂きありがとうございます。

では、ご講演頂いた内容についての質問および意見交換を行いたいと思います。ここからは、武田先生に加えて武田先生主宰「研心塾」のメンバーである岩崎氏、藤村氏のお二方と現役大学生である宮城君、金城君にもパネリストとしてご参加頂きます。なお、「研心塾」とは、武田先生を中心に多様なバックグラウンドを持つ方々が集まり、様々なテーマについて議論を交わし情報交換を行うことで「心」を「研」ぎ人を育てるための勉強会のことです。

さて、武田先生のご講演においては、「地球規模でのエネルギーの今後」について、そして「地球を支えていく人材がどうあるべきか」ということについてお話がありました。これから二つのテーマを考える上で重要なキーワードとして、「Disruptive Innovation（破壊的革新）」、別の表現で例えるならば、既に迎えたつある新時代においては、崖を飛び越える「勇氣」と「方法」が大事である、という内容でした。そこで、沖縄を含む日本の人材を今後どのように育てていくということも含めて意見交換を行いたいと思います。

意見交換に先立って、パネリストとしてご参加いただく四名の方々に簡単な自己紹介をお願いしたいと思います。

岩崎：現在は、フリーランスで主に政治・経済、また国際、金融等ニュースを扱う仕事をさせて頂いています。キャリアとして一番長かったのが、東京証券取引所でのレポーターで、五年ほどお仕事をさせて頂いていました。その後、仕事の傍ら二〇〇九年に早稲田大学の大学院公共経営研究科に所属し、そこで武田先生の授業を取らせて頂いたことをきっかけに、今ここにおります。今日、初めて武田先生のお話を聞かれた方にとっては、難しい部分も多かったかと思いますが。しかし、先生のお話は、聞けば聞くほど癖になるという感じで、次第に、そこにある真理を突き止めた、と考えるようになります。大学院卒業後の二〇一一年三月、武田先生に是非とお願いをしまして、有志で勉強会をやらせていただくようになりました。その勉強会の名前が「研心塾」です。研心塾は、早稲田大学の学生やOBが中心となっていますが、政府官僚の方や企業経営者、その他ビジネスパーソンの方々にもご参加頂いており、徐々に参加メンバーも増えています。

この有志の勉強会は、三ヶ月に二回くらいペースで定期的に開催しており、毎回、様々な方をゲストにお招きしてお話を伺っています。これまでの勉強会については、Facebookに研心塾のページがございますので、ぜひそちらをご覧くださいと思います。

自身の経歴に戻りますと、成蹊大学を卒業後に商社に入社し、六年ほど輸出入業に携わっていました。その後、フランスの証券会社にて二年在籍していたのですが、そこで株式市場のニュースに触れる機会がありました。その時に、自分がこのようなニュースを伝える立場になりたい、という思いが生まれ、一念発起してレポーターに転身致しました。現在、レギュラーの仕事では、株式市場のニュースを扱うラジオ番組やCS放送で大前研一先生が出演している番組のアシスタントをさせて頂いております。その他、仕事の合間を縫って武田先生のお手伝いをさせて頂いたり、アフリカの貧困削減の活動を行っているNGOの活動にも参加させて頂いたりしています。

こうして自分の経歴を皆さまにお伝えしてみると、なんとまとまりのないキャリアだな、と思います。しかし、二〇〇五年のスタンフォード大学卒業式において、アップル社の前CEO、スティーブ・ジョブズが行った伝説のスピーチを皆さまご存知でしょうか。このスピーチは、Youtubeなどでも見ることができると、ぜひご覧頂きたいと思うのですが、そのスピーチの中で、彼は「Connecting Dots」という言葉を使っています。つまり、「点と点をつなげる」ということです。一見、無駄だと思われる経歴や経験が、後に非常に役立つことがあるのだ、ということを経験者に語りかけたのです。私はこの言葉を心の支えのようにして、自分のやっていることは何かの役に立つ、どんなふうに繋がっていくのか、今はまだ見えない部分もありますが、心の赴くままに好きなことをやってみよう、そう思っています。ですから、学生の皆さんには、若いときに積極的に色々なことに取り組んで頂きたいと思っています。なぜなら、私自身、一定期間海外に出てみるという経験をしなかったことについて本当に後悔しているからです。もちろん、まだまだ諦めていないので、皆さんと意見交換をしながら、いろいろと刺激になるようなお話を聞きたいと思っています。よろしくお願いします。

藤村：簡単に私の経歴を紹介させていただきます。私は武田先生と同じく愛媛県出身で、東京大学の理学部で物理学を専攻し、プラズマ核融合の研究室にいたこともあります。卒業後、ロンドン大学への一年間の留学を経て、アメリカのペイン・アンド・カンパニーという経営コンサルティングの会社にて一〇年弱勤めました後に、早稲田大学の公共経営研究科に入学し、武田先生とお会いしました。その後、ハーバードケネディスクールに行き、今年の六月に帰国したところです。

さて、岩崎さんからスティーブ・ジョブズの「Connecting Dots」のお話がありました。これは非常に印象に残るスピーチです。もしかすると、そのスピーチを聞いただけで人生が変わるかもしれないという程、感銘を受ける良いスピーチですので、ご覧にな

っていない方にはお勧めします。そのスピーチが行われたのは、スタンフォード大学の卒業式です。私は、大学という場所は人生観を変える場所であり、そして、それこそが教育の大きな目的の一つなのではないかと思っています。私はハーバードに在籍していましたが、そこは日本の大学とシステムが違っていて、入学願書に「自分はハーバードケネディスクールに行つて、こういうことを学び、こういうことをその後したい」ということを記入し、提出しなければいけません。しかし、そこに書いたことを卒業後に本当にやっている人というのは、実は本当に少ないのです。これはどういうことかと申しますと、日本では、一つのことに決めてやり続ける文化、武田先生の言葉をお借りしますと、専門家が非常に尊敬されるという文化があるのですが、アメリカにおいては幾分違った環境だと言えます。むしろ、いろいろなキャリアを組み立てて、そこから何かを生み出していく人が尊敬される社会だと考えております。私にとつても、ハーバードでの経験は日本の大学に比べてかなり衝撃的で、やはり、その後の自分の人生を決めていくものであったと思います。

東大とハーバードケネディスクールの教育を比べて一番感じたのは、教養とリベラルアーツの意味が全く違うということです。東京大学には教養学部というのがあり、学部の一、二年生のときには皆、リベラルアーツと呼ばれるものを学ぶことになっています。しかし、その中身というのは、ハーバードで教えられているリベラルアーツとは全く違っていました。

今回のテーマであります「エネルギー文明の崩壊」との関わりについては、私自身が物理学専攻だったからというわけではありませんが、先の原発事故に関しまして、エンジニア、もしくはサイエンスや工学の問題というよりも、人の問題だったのではないかと思います。想定外という状況、そもそもそうしたフレームワークを生み出してしまった「人」、そして、そのような「人」を作ってきた日本の教育、そこに問題があったのではないか、個人的にはそのような問題意識を持っております。そのあたりについても、この後お話できれば幸いに思います。よろしくお願い致します。

宮城：私は、沖縄国際大学企業システム学科四年次に在籍しております、入学から七年が経つのですが、二年間のカナダ留学で、自分が住む地域に対して何も知らないということに気が付きました。帰国後、沖縄のためにいろいろな行動をしていきたいと思つていところへ、この場において意見交換をさせて頂く機会に巡り合いました。本日はよろしく申し上げます。

金城：私は、沖縄国際大学企業システム学科三年次に在籍しております。今年の三月と九月に、短期間ではありましたが中国へ留学し、中国人の生きる姿や、格差社会を初めて目の当たりにしました。自分と同世代の方々が一生懸命働いていて、基礎的な学業を

修めていないという現実を前に、私は何をやっているんだ、と思い知らされ、自分にできることは何だろう、そう考えながら日々活動しています。今後の目標と成すべきことを明らかにすることを目的に、来年の三月に中国の大学に留学することになりました。本日は縁があつてこの場に参加させて頂くこととなりました。よろしく申し上げます。

宮森：ここにご紹介した四名の社会経験のある方々を中心に、武田先生を交えて意見交換していきたいと思つています。

それでは、まず沖縄大学の学生から、先輩方あるいは武田先生に対して、何か質問はありますか？

金城：武田先生のお話の中で、「パラダイム・シフト」「変化の時代」というお言葉がありました。確かに変化の時代とは言われているのですが、その変化に気づくのは難しいと感じています。本来、自分で気付くべきなのではないでしょうか、私たち学生は、どういった視点で物事を見ていけば良いのでしょうか。また、これまで、先輩方の変化への気づきについて教えて頂けますでしょうか。

岩崎：難しい質問ですね。「パラダイム・シフト」の時代だというのはよく言われることなのですが、では、次の時代に何がどう変わっていくのか、どういう時代になっていくのか、それは誰にもわからないと思つています。武田先生の言葉に、「形が見えないからこそ理解しなければならぬ」というお話がありました。正直に言うところ、私もそこがまだまだ勉強不足で、きちんと把握しきれない部分だというのが本音です。

藤村：「変化」と「気付く」について、変化に気付くかどうかというのは、自分の考え方がしっかりあるかどうかということではないかと思つています。なぜなら、自分の考え方、物の見方があるからこそ、どうもそれが通用しない世界があるようだ、というように気付くからです。逆にそうしたものが無いと、変化が起こっても気が付かないのではないかと。だから、何か変化が起きたときに気付くために、自分の信念を築いておくということが非常に大事なのだらうと思つています。

宮森：自分という土台を持っていなければいけないということですね。武田先生は、変化の気付きについて、どのようにお考えでしょうか。

武田：私自身は、あるときおかしいなと気が付いたら、とりあえず、えいや、と飛び越える癖があります。パラダイム・シフトとか、変化の時には、実はこの癖がある人の方が理解しやすいことがあるのではないかと自分で気が付いたのです。哲学で言えば帰納

ではなく演繹手法です。無責任なことを言うわけではありませんが、どうかあまり深刻に囚われてしまうことなく、「武田という者が変化の時代だと言ったから」と、まず信じて頂きたい。そうすると、その後、氣をつけて見ていると、「ああそうだ、あの人はこういうことを言っていたのか」とコネクティングできるはずです。

私自身が、えいや、と飛びだしたのには理由があります。テネシー大学の学長特別補佐をしていたとき、大学内外の人たちが品質管理等でも有名なデミングの話を聞きに来ました。私は物理学をやっている、品質管理には携わったこともなく、あわててデミングを勉強したところ、物理学者のはずの彼が、どうもアメリカで話した内容をでは哲学者そのもの。なぜ物理学者が哲学者的話をするのか分かりませんでした。そこで初めて、彼の著書や出版したものを手にいれるだけ読んでみたのです。そうして、デミングという人が品質管理だけでなく、戦後の日本の技術・経営思想に随分影響を与えたという事実も分かりました。それから、もう一つ氣が付いたのが、彼はギリシャのソクラテスやプラトン、アリストテレスの言葉を多く引用しているということです。これらの人が活躍した時代はそれまでの王制や貴族制から、突然、大きな民主化の波が起こっていった。あの時代のギリシャというのは、今と似ていませんか。その民主制の下、一人一人の市民が能動的に貢献できるようにするためにどうやって市民を教育するのか、そしてその教育体制をどう国に織り込むのかを真面目に考えた人です。騙されたと思って、ぜひ「リパブリック」など、プラトンやアリストテレスの書物を読んでみて下さい。あれは彼らを取り組んだ育人研心論なのです。

岩崎：武田先生のお話を聞いている間に、私なりにもう一度考えてみました。「今までの常識を疑う」ということ、それが大切なのだと思います。変化の時代だということとは、今まで当たり前だと思われていたこと、これまで常識だと思われていたことが、そうではなくなるといふことなのです。ですから、自分の考え方をきちんと持った上で、今、当たり前だと言われていることが本当に正しいことなのか、それがこれからも通用することなのか、常に自分の頭を使って考えることが大切なのだろうと思います。

現在、お仕事で一緒にさせて頂いている大前研一さんは、学生の頃、全く学校に行かなかったそうです。お姉様が「学校に行かなかった研一」という本を書かれたくらいです。こんなことを学校で言うのも違和感がありますが、なぜ学校に行かなかったかというところ、「先生の言うことを聞いていると、先生以上の人間にはなれないから」というようなことを仰っていたそうです。この話は一例なのですが、今まで自分の信じていたものが、自分にとって本当に重要なのか、その辺りを考えてみるということも大切だと思います。

宮城：先輩方は自分自身の変化や、環境の変化に気付いたからこそ、色々とキャリアを変えてこられたと思います。ちよつと漠然とした質問ではありますが、キャリアを変え

る場面において、自分の軸のようなものがどこにあったのか、また、軸の存在にいつ氣が付いたのか、そうした変化を受け入れた際の背景についてお聞きしたいと思います。

藤村：実は、私は、私は転職をしたことがないので、キャリアを変更したという経験はありません。しばらく経営コンサルタントの仕事に携わり、その後早稲田、そしてハーバードに進学して戻ってきたところなんです。ちょうど今、人材育成の方面にキャリアを展開したいと思っているところですが、自分の中に何か軸があるのかと言われると、正直ないです。自分の中に軸があるというより、外部からの影響の方が大きいように思います。ハーバードケネディスクールに行つて、こんな教育があるのかということを感じ、これは日本に持つて帰りたいと思いました。それ自体は自分の考え方があったというよりも、外部から刺激を受けたからそう思いついたのです。それから、私が経営コンサルタントという仕事を選んだのも、ロンドンに居た頃に、周りの人間がこういう仕事に向いているのでは、と言ってくれたからです。もともとそんな職業があるなんて全く知らなかったのです。だから、キャリア転換というのは、自分の考え方に従つて決断する方々も当然いらつしやると思うのですが、実は氣付かないところから与えられるということもあるのではないかと思います。

岩崎：実は昨日、早稲田の客員教授で読売新聞の記者をされている方のご紹介で、読売新聞の政治部の記者をずっとやっておられた方から、「オーラルヒストリー」という内容でお話を伺う機会がありました。お名前は具体的には出せないのですが、今話題の渡辺恒夫氏と非常に親しいと言われていて、超名物政治記者の方です。

ご存知の方もいらつしやるかもしれませんが、オーラルヒストリーというのは、様々な経験を持つている方々に対し、ご自身の幼少の頃の話から、どうして現在の職に就いたのかといった内容に関わる経験談をインタビューではない形で自由にご自身に話してもらい、その人から出てくるものを全部記録していくというものです。その方は小さい頃から新聞記者になりましたので、大学は早稲田に行かれたそうです。その当時は、企業に入りたかったら慶應、新聞記者やマスメディアを目指すなら早稲田、そのような風潮があったからです。当時一番読まれている新聞といえば毎日新聞で、読売新聞はそれほど部数が発行されていなかったそうです。その方も小さい頃から毎日新聞を読んでいたもので、毎日新聞の記者になりたい、という思いが強かったのだそうです。ところが、マスメディアの採用試験を受けて、最初に受かったのが毎日新聞、その後読売新聞の合格通知は来たのだけれど、毎日新聞からは合格通知が来ない、でも読売にはもう返事をしなければいけない。そのような状況になって、相当悩んだ末に読売新聞に行こうと決めた、というお話を伺いました。読売新聞に入つた後も毎日新聞に対する思いは残っていたのですが、日々の記者の仕事はとても楽しく充実しており、政治記者として多忙な生

活を続けていくうち、あまりの忙しさに、そのことは忘れてしまっていたそうです。今になってみると、結果的には、読売に入って良かったという状況になっていた、という話を聞きました。これは、藤村さんのお話とも少し繋がる部分もあると思います。チャンスやきつかけは、もちろん自分から取りに行く時もあると思います。しかし、与えられたチャンスやきつかけをいかに受け入れ、それに対してどう積極的に挑んでいくか、そのような場合もあるのではないかと思います。もうこれしかない、と思う必要はありません。チャンスはいろいろなところに隠れていて、実は存在している。しかし、自分が見つからないと思っていると、それを見逃してしまうことがあると思うのです。ですから、様々な方向に視野を広く持つておく、その辺がポイントではないかと思えます。

宮城：武田先生はお話の中で「心を研ぐ」ということ、それから、「脳を作る」ということを度々仰っていました。まだはつきりと理解できていないのですが、「脳を作る」ということは、細かいことを積み重ねていく、ということかと思っているのですが、いかがでしょうか。

武田：脳を作るということは、時間ばかりですが、やり方は簡単です。ある考え方を試してみても、それが合っているかどうかを自分で常にチェックする。フィードバックさせるという言い方がありますが、あてはめ、その結果を見て、駄目だったらまた直し、チェックと無限のサイクルです。大学で学ぶだけではなく、日々、それをやって一〇年たつと、私たちはこれを一万時間のルールと言っています。一〇年は日に三時間やることですが、本物の達人、エキスパートになっていくのです。先に見える、見えない、の話では、すぐに見えだすとは言いませんが、そうしたことを積み重ねていくと見えるようになっていくのです。

講演でも触れましたジョージ・ホッツやステイブ・ジョブズについて、彼らの共通点として大学を中退したということがあります。当時の大学は、ハーバードであつてもまだ彼らのような人たちを迎え入れるだけのカリキュラムができていなかったということです。現在は、その辺りに気付き、どのようにして若い人たちに刺激を与えるかといったことに注目するなど、少しずつ変わっていつているように感じます。そして、その刺激は運動するのと同じように、繰り返し与える必要があります。かつ、周りが与えなければいけないのです。かといって、次から次へやりたいことを乗り変えるのはダメです。先生方や親が煽てて、嫌がろうがやらせる。そうしている間に、本当に好きになつてしまうものです。仕事が嫌い、学ぶことが嫌い、そんなふうに言うのは、本当に学んだことがない人達です。一回学び出したら、それが本当に楽しくなる。そういった経験をしてもらわなければいけない。そうすると、それに合わせた脳ができてくるのです。あなたは素晴らしいと幼稚園の先生に一言褒められたことがきっかけで、一生それが付いて

まわることもあるのです。

基本的なことは三つあります。一つ目は、自分に対して常にクリティカルシンキングすることです。自分に優しいではなく、自分を批判する厳しさがなければいけません。日本ではないのですが、アメリカでは四千校くらいの初級学校で哲学の時間があります。そこでは様々な対話を通して、考えること、そしておかしいと思つておかしいとおかしいと言える、どんなえらい人が言つたことでも間違つていないことは間違つていないと批判させるのです。そして、先生は絶対に結論なんて言いません。そうすると、高校くらいになると、大統領のスピーチがおかしい、新聞の論説がおかしいと気が付くようになるのです。

それから二つ目は、世界市民、コスモポリタンになりなさい、ということです。中国語でもいいし、英語でもいい、母国語の他にもう一つくらいは身に付けるべきです。英語なんて難しくありません。アメリカ人はみんな英語を話しているじゃないですか(笑)。それを大学で学ぼうとするからおかしくなつてしまうのです。文法から考えるのではなく、日々の訓練でやっていけばいいのです。小学校から英語を学んでいると言っても、日本の現在のシステムでは大学まででトータルで一千時間も学んでいないのです。先の一万時間のルールで分かるように英語の達人になれるはずはない。学生の方々の時代には、世界はもうフラットになっていきますから、上司、あるいは部下、共に働く人々が別の文化の中で育つたケースはたくさん出てくるでしょう。それが当たり前になるのです。そのときに、もう一つの文化を知っていると、より多くの文化も理解ができるようになるのです。自分は理科系だとかそういうことは全く関係のないことです。自分がやっている専門以外のことを、少なくとももう一つ学ぶべきです。沖縄の文化を知っているのだつたら、他の国の文化も同じように知る必要がある。

最後の一つは、常にイマジネーションが働く人になりなさい、ということです。イマジネーションが働く人になるためには、小学校のときには小学生らしく遊ばばいいのです。ある時期まではいっぱい遊ばせることが大切です。成長してからには、詩をやる、芸術をやる。イマジネーションを作るためには、これはものすごく必要なことです。そして、これらの基本を押さええていけば、誰でも天才になれるということです。超天才というのは少なくとも、ミニ天才くらいにならないくらでもなれるのです。

宮森：どうもありがとうございました。大変短い時間でしたが、武田先生を交えた学生との意見交換会はここで終了させて頂きます。皆さま、どうもありがとうございました。

上江洲：会場からの質問をお受けしたいところですが、お時間の都合上、代表して私の方から岩崎様と藤村様にお尋ねしたいと思います。

一般に、大学院以上の学歴があると就職ににくいというイメージがあると思います。

お二人は、就職されてからまた大学院にご入学なさっていますが、その決定に際して、不安などはなかったのでしょうか。そして、どのような人生設計の下でキャリアアップをなさったのか、その辺りをお伺いしたいと思います。

岩崎：大学院を卒業していると、逆に就職に不利になるのではないかとのお話ですが、それも、やはり古い常識なのだろうと思います。私が就職した時代も、大学を卒業して、四月に新入社員となるのが普通で、大学院から来ている人や、アメリカの大学から来ている人というのは本当に少ない時代でした。今、すごく羨ましいと思うのは、そうした常識がもう変わってきているということです。大学を卒業した後に、例えば一年とか二年、海外に行き、その経験をもって帰ってくるのが就職にプラスになる、そういう動きが出てきています。そして、それを企業側でも徐々に受け入れているのです。これは、早稲田の大学院の公共経営研究科で、楽天に就職が決まったという学生の話ですが、楽天からは就職の内定をもらった後、「入社を遅らせても構わないので、半年なり、一年なり、海外に行ってきていいですよ」というお話をもらったそうです。

私の場合は、好きなことをやっていて、気が付いたらここに居た、という感じですが。経済や政治のニュースを扱う仕事をしている中で、やはりきちんと勉強しなおさないといけないな、という思いが生まれ、社会人しながら大学院に通うことになりました。ちよつと皆さんの参考にはならないかもしれませんが、私個人はそういうきっかけがありました。

武田：脅すつもりはありませんが、実は、二〇二〇年には、今はまだ存在していない仕事が生七〇％創出されると言われています。ですから、今の仕事で一生メシが食えるなんてことはないと考えるべきです。若い方々に大変申し訳ないことですが、これがパラダイム・シフトの時代ということです。それから先ほど藤村さんから、日本とアメリカの教養についての考え方が全く違うというお話がありましたが、どのような時代が来ても、きちんとコネクトできる能力さえ持っていれば、どんなことにも対応できるようになるのです。最初のひと月くらいは難しくても、少し背伸びすればできるようにする、それが日本に必要なリベラルアーツです。

「一七歳までのガラクタ知識が常識なのだ。」これは私ではなくアインシュタインが言ったことです。つまり、そもそもいつの時代にも通じる常識なんて無いということです。皆さまにも覚悟して頂いて、次時代に向けた新しい脳を作ることを受け入れて頂きたいと思います。それがこのパラダイム・シフトの時代なのです。ただし、責任は自分できちんと取りなさい、ということが、このパラダイム・シフトの時代における、もう一つの大切なことです。かのスティーブ・ジョブズが大学一年で辞めたのは、彼が里子であつて、金銭的な事情もあつたそうです。しかし、彼はその大学での一年、大変多くを学

んだと言っています。もしそうでなかったら、私たちは、パソコンの中に今ほどいろいろな書体を見ることは出来なかったでしょう。あれは彼が、大学時代に興味を持ってやったことで、それが今のパソコンの中に生きているのです。

藤村：会社を辞めて大学院に行くということは、非常に不安なことだと思います。常識が変わってきているというのは確かにあるのですが、一〇〇％変わりきっているわけではないし、そうは思わない人もたくさんいるというのが今の日本の現実だと思います。

私自身がどうだったかという点、正直、会社を辞めるということは非常に怖かったです。まず、ベイン・アンド・カンパニーというアメリカの会社に新卒で入社したのですが、この会社はアメリカの会社の中でも非常に成果主義がはつきりしていて、平均滞在年数が三年程度という会社です。確か当時の東京事務所には八〇人くらいのコンサルタントがいたと思うのですが、そこに新卒で入って、初めの月にいきなり一人目が辞めました。その後も、先輩方が毎月辞めていくような状況でした。本当に驚いて、会社でこんな簡単に辞められるものなんだ、と思いました。自分の親世代が、当然のように、終身雇用・年功序列でずっと働いてきているのを見ておりますし、周りには会社を辞めて転職したなんて人はほとんどいなかったものですから、そんな簡単に会社を辞められるということが非常にショックでした。ただ、そうした環境で働いていると、だんだん慣れると言いますか、そういうこともあるのかな、というように感覚が変わってきました。後に分かったのは、世界的に見れば終身雇用の方が逆に非常識だという現実です。例えば、最近のアメリカ人は、平均四・五年で一回職を変えると言われています。もしかすると、これから日本もそのような時代になるかもしれません。四年半に一回、一度身に付けたものをリセットして、全く別の組織で一から始めるのはかなり大変なことです。しかし、一歩日本の外に出てみると、それは当たり前、むしろ常識なのです。転職しようと思ったときに、どのように自分を高めていかなければいけないかと、まさに変化に適應できるような人になっていかなければいけないということです。もしかすると、変化に適應する力、それが二一世紀の社会人、あるいは働く人間として、一番大切な根幹的な能力の一つになっていくのでは、そんな気がしています。私は、徐々にそのような確信が持てるようになってきました。

私はハーバードに在籍していた頃、ルームシェアをしていたのですが、その一室にハーバードの学部を卒業したばかりのアメリカ人がいました。私が向こうに行ったのは七月か八月だったと思うのですが、彼は八月になつてもまだ職が決まっていなかった。皆さんはもしかすると、ハーバード大学の学部を出た人なんて、簡単に職が決まるに違いないと思つているかもしれませんが、全くそのようなことはありません。卒業してから職を探すという人もたくさんいます。むしろ、いわゆる新卒採用なんているのも、日本だけの常識でしかありません。もし、日本以外での就職を考えるのであれば、新卒採

用のサイクルに乗る必要なんて全く無いということなのです。ですから、日本の環境の中で育っていると、大学院に行くことが不安だというのは、確かによく理解できることです。私自身もそうでした。しかし、一歩外へ出て、実はその不安自体が世界の非常識なのだという認識を持つてもらえると、今後のキャリア展望はむしろ明るくなるのではないかと思います。

武田：講演の中で「脳を作る」、「心を研ぐ」という話をしましたが、今まで心配だったことも、終わってしまったえば全くなんともなくなっただという具合に、脳を作り、心を研げば、同じものを前にしても、全く違ってみえるようになるのです。

本日、私が一番言いたかったことは、沖縄ほど優位な条件を備えている場所は、世界のどこへ行ってもないということです。私は本土復帰以前から来ていますから、沖縄の基地問題の酷さは知っています。しかし、一方で、アメリカを担保しているのです。本日出席している方々は、世界第一の強国に話せる立場にあるのです。ですから被害者意識に起因する「ものの見方」を変えてください。中国と違って、間にアメリカがいなくてとても対等には付き合えません。朝貢で満足する時代ではないのです。なぜ、もともと日本政府に対して、あれをしてくれこれをしてくれと将来への要求を出していないのでしょうか。このような話をさせて頂く際に、沖縄の方々にに対して私がよく持ち出すのは太田朝敷です。この方は、琉球新報を設立したメンバーの一人で、明治の時代に沖縄に出た啓蒙家です。彼の書いた本を読んでみて下さい。非常に素晴らしいものです。その太田朝敷が常に言っていたのは、日本政府の言う通りではなく、自分で考え方を出しなさい、ということです。本土復帰してから四〇年の間に一〇兆円という金が沖縄に投入されているのです。一〇〇万人のところへ一〇兆円ですから、本当なら未来投資としてずいぶん残っているはずなのです。ところが、日本政府の言う通りにやっているうち、大半は本土の企業が自分たちのものにしてしまう。日本政府に対してどうしてもっと要求していかないのでしょうか。アメリカや世界の知者と連携を組んで、日本政府へ考え方を出していいではないですか。具体的には若い皆さん方への投資です。沖縄で海外留学が出来る特権を作るべきです。仲井真知事にお願ひしても良いでしょう。必要があれば、私もお手伝いします。今のところ、まだ日本は経済的に余裕があります。しかし、もう、何年か先はわかりません。日本政府はイタリアと同じ状態になる可能性があります。それならば、早めに沖縄の将来を形作るよう、動いていかなければいけません。沖縄よりはるかに条件の悪かったお隣の台湾が、今ではITCで日本をはるかに凌ごうとしています。ですから未来への投資は急がねばなりません。そのためにも、きちんとマインドを切り替えて、素晴らしい沖縄を見合う、素晴らしい人財を創っていかなくてはなりません。

上江洲：講演を頂いた武田先生をはじめ、岩崎様、藤村様、宮城様、金城様、本当にありがとうございました。これで、本日の講演会「エネルギー文明の崩壊を越えて」を終了させて頂きます。また、最後になりましたが、本日は年末のご多用の中、ご参集いただいた皆さま、誠に有り難うございました。